わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ

連250載

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

家重と忠光

――小説の妙を思う

同じ題材をテーマとしているのに、見せ方や描き方によって全く異なる様相が目の前に広がる…、最近そんなことを経験した。

八代将軍吉宗の後継にあたる九代将軍家重とその側近である大岡忠光を主人公とした小説がある。吉宗は何度もテレビ化されている通りで、歴代の将軍の中でもその人気はトップクラスだろう。一方、吉宗の長男である家重はあまり知られていない。おそらくは脳性麻痺ゆえに、言語障害と身体の不自由さを有していたためである。障害があったにもかかわらず「現将軍の最長子が相続者」という暗黙のルールに従い、吉宗は一部周囲の反対を押し切って長男である家重を後継者とした。

大岡忠光は、これも良く知られる大岡越前の縁戚にあたり、交流もあったとされる。忠光は、「うわ、うわ、うー」としか言葉を発することができない家重の、誰もが理解不可能と思える言葉を唯一理解できる人物として、その名を歴史に残した。

村木嵐による小説『まいまいつぶろ』は、家重と忠光、この二人を軸にしたもので今年の5月に刊行された。タイトルの『まいまいつぶろ』は、かたつむりの意味。排泄（はいせつ）が間に合わず尿漏れをすることがあった家重が歩くと、尿を引きずった跡が残ることがあった。それをかたつむりになぞらえたものである。

この小説の中の家重と忠光は、最後まで深い信頼関係で結ばれている。二人の結びつきはまるでボーイズラブのようで誠に麗しく涙を誘う。「落涙必至」と帯にある通りである。

ところが、昭和31年に発表された松本清張作の『通訳』では、登場人物は同じでもまるっきり異なった二人を見ることができる。前者においては、なぜ忠光だけが家重の言葉を理解できるのかは明らかにされていないが、『通訳』では、忠光の能力は決して神がかり的なものではなく、家重の側に長くいたためにその性質や癖を心得ることにつながり、微妙な表情をとらえて言いたいことを推察しているに過ぎない、と現実的にとらえている。

両者の決定的な違いは、『通訳』に登場するエピソードにある。忠光は、自身の好物でもある雲丹（うに）を献上してくれる大名と家重の間に入って、通訳の役に徹している。突然、いつになく家重が興奮し、しきりに何ごとかを口にするが、忠光はそれを理解することができない。焦った忠光はとっさに、雲丹は家重の大好物でありとても喜んでおられる、と告げるのである。くだんの大名が以後も大量の雲丹を献上し続けるのは当然だった。

ところが、ある朝ふと見ると、家重の朝餉（あさげ）の膳に雲丹がないことに忠光は気づく。なぜ、好きな雲丹を出さないのかと、古くから務める給仕に尋ねたところ「いいえ、上様（家重）は、雲丹はお嫌いでございます」とあっさり答えるのである。

家重の言葉がわかるのは自分だけと思っていた忠光は、それが間違いであったこと、さらにその間違いを家重が咎（とが）めなかったことに気づき、「茫漠（ぼうばく）とした家重の内部にある無類の善良さにたたかれたよう」な衝撃に打ちのめされる。

両方とも力作だが、村木氏の小説に比べ清張作は容赦なく、読者までも突き放す。好みはひとそれぞれだろうが、深い余韻を残すのは後者ではないだろうか。雲丹の話は清張による創作だと思うが、ここに、事実を超えた小説の醍醐味（だいごみ）を味わうことができる。

本を愛する者にとっては至福のひとときといえる。

イラスト・伊藤香澄